

滝沢馬琴
下

杉本苑子



たきざわ ばきん
滝沢馬琴 (下)

すぎもと そのこ
杉本苑子

© Sonoko Sugimoto 1989

1989年11月15日第1刷発行

発行者——加藤勝久

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-01

電話 東京(03)945-1111(大代表)

Printed in Japan



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

デザイン——菊地信義

製版——豊国印刷株式会社

印刷——豊国印刷株式会社

製本——株式会社上島製本所

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。
送料は小社負担にてお取替えます。なお、この本の内
容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いい
たします。(庫)

ISBN4-06-184559-4

江苏工业学院图书馆

藏书章

滝沢馬琴(下)

杉本苑子

講談社

滝沢馬琴

(下)

四谷信濃坂に移転後、はじめての晩春がめぐってきた。

朝、馬琴が縁に出て、胸を叩き臉をこすり……という、例の日課の健康法をくり返しているところへ、大きな竹籠を前後に二つ天秤棒で差し担いだどこかの下男か百姓ふうの若者が、すたすた門をはいつてき、玄関まで十四、五間ほどの通路の片側にむさくるしく茂っている竹藪へもぐりこんだ。手に刃先のとがった大鑿と、金べらをさげているところを見ると、笥を掘るつもりであろう。馬琴と目を見合せながら挨拶もしない。藪は地主のもの、当然な顔をして男が歩いてきた門内の道は、しかし地代を払って借りている滝沢家の地所である。

古家の、ただっ広さに比例して敷地も広い。明神下の旧居とはくらべものにならない。それだけに手が回りきらず、越してきた当初ほどではないが敷地内は荒れていた。『猫額大の小庭』と、知友への書面などには自嘲した表現を使っていたけれど、明神下の庭は舐めるように楽しんで、手入れも植木屋も欠かさなかったものである。宗伯の草取りは丹念さを通り越してほとんど偏執狂的といつてよかつたし、馬琴自身の気ばらしも庭いじり一つに尽きていた。

宗伯が死に、信濃坂に移ってから、だがその気力も、興味すら萎えた。嫁のお路と婿の清石衛門が去年の古落葉を熊手で掻き出し、枯れ伏して蔓も根も、からまり重なっている雑草を刈り払っても、下からもう今年の草が、びっしり生えはじめているうつつうしさである。真夏のいきれが思いやられた。

ぐるりを囲う四ツ目垣は腐朽がひどい部分だけ竹を結び替えたから、新旧入りまじってかえって見ぐるしい。これも朽ち木にちかい自然木が表通りに面して二本、扉もなにもなく突っ立っているのが門で、地主の竹藪とは、境界を仕切る杭ひとつなかった。

季節になれば筍が生える場所だし、『瓜田に履をいれず李下に冠をたださず』を信条とする馬琴はにがしがって、かねて家族たちにも、

「藪へは一步も踏みこんではならんぞ」

嚴重に言い渡していたやさきだけに男の闖入は氣になった。

たぶん地主から命じられてきた掘り子ではあろうけれども、ひとことの挨拶もせず、大きな顔で門内を通りぬける無礼は我慢なりがたい。

起きぬけ早々馬琴は不快になり、嫁を呼んでどこの何者か、男の素性を訊きたださせたが、もどってきてのお路の報告は、やはり、

「地主さんとお使いだそうです」

と言うものだった。

「これからしばらくのあいだ、毎朝きて筍を掘ってゆくと言っていました」

書齋にとって返し、馬琴は一気呵成に、いささか切り口上な手紙を地主あてに書いた。

『ただいま貴家の使いと称する者が、なんの断りもなく敷地内を通り、笥掘りをしているが、それでなくても当方としては、成りものの番人をいやおうなく押しつけられたかたちで、気重くも、はた迷惑にも思っていたところである。藪の周囲には垣を結い、往来に面した方へ木戸でもつけて、掘り手はそこから出はいりするよう御手配ねがいたい』

だいたいそんな文意だった。

男に届けさせようと急いで封じて、

「お路、……お路」

いま一度、嫁を呼んだが返事がない。ふだんから打てば響く受け答えはしない女である。相手には聞こえないようなま返事をばそぼそ口の中でし、むすツとした顔つきで襖をあげるのが習性だが、それにしても来かたが遅い。

縁さきに出て馬琴が見回すと、お路、お百、太郎やさちまで、総出で笥掘りの手ぎわに見とれているさいちゆうであった。

家族どものその背中つきが、馬琴の目にはいかにもものほしげな、卑しいものに映った。

「そんなところで何をしている。家へはいりなさいッ」

大声で叱られて、女たち子供たちは不満顔をならべながらぞろぞろもどって来た。

「まだ頭も出していないんだよ、地面がちよっぴり持ちやがっているだけで、あの人、笥のあるところがわかるんだもの、すごいだろ。お祖父ちゃんも見れば面白いのに……」

太郎ばかりでなく、お百やお路までが下町育ちだけに、筍など八百屋の荷台か店先に積まれているのしか目にしたことはないのだろう。馬琴はしかし、

「面白いものか。なにが、そんなもの……」

不機嫌にきめつけ、

「高畑先生のお宅へ出かける時刻じゃないか。どうもお前は、学びに不熱心でこまる」

太郎を学塾へ追いやった。

小風呂敷を片脇に、すつとんで出てゆくうしろ姿と入れちがって、門をはいつてきたのは清右衛門である。筍掘りの男とそっくりな竹籠を、これも天秤棒で担っているが、中味は胡瓜、茄子、南瓜などの苗であった。

「菜園をつくる気か」

「味噌汁、漬けものの実ぐらいいは自家で賄まかなわれるといいと思ひましてね」

空地はあるのだし、そのつもりで冬のあいだから穴に落葉を溜めて腐らせておいたのだ、と語る婿へ、

「たすかるよ清さん」

お百がこぼした。

「なにしろ不便なところでねえ。八百屋魚屋の買物はいちいち六軒町まで出なきゃならないし、いまもこれからさちをつれて行くところだが、銭湯はお岩いなり稲荷の角にあるんだよ。湯にはいるのに半日がかりなもの、いやになっちゃう」

「文句はいいから、出がけにこの手紙を笥掘りの男に渡しなさい。宛て名は地主だ」と言いつけて馬琴は書齋に引きとり、清右衛門は裏へ廻って行った。

湯道具を手にも、お百もさちをつれて出て行き、いつのまにか笥掘りさえ去ったらしい。やっとりもどした静かさの中で、それからしばらく、『八犬伝』九輯下の中の執筆に馬琴は没頭した。厠に立ったのは、一ツ時ほどしてからだろうか。小窓の外にひろがる裏の空地で、清右衛門とお路が立話しているのが見えた。すっかり耕やされ、整然と畝立った黒土は、つい昨日までの荒れを忘れたように、たのもしげな畑地に変貌していた。

等間隔に、そこに茄子苗を植えてゆく清右衛門のごみ背も、本来の百姓に還っている。交さ

れている会話を生まれ故郷の村のはなしであった。

「蕨を売って、やっと土間から座敷までひろびろとしたと思うともう、麦の刈り入れです。たちまちまた足のふみ場もなくなってしまう……。貧しい村ですからね。祭なんぞも淋しかった」

「でも、ご馳走をつくるのですし？」

「煮しめに濁酒、餅ぐらいなものです。わたしら餓鬼の時は山桑の実を採り溜めましてね、口の中じゅう紫色にしなからトントコ、トントコ、太鼓を叩くだけが祭の楽しみでしたよ」

「そのころの清右衛門さんのすがた、何だか目に見えるようですよ」

小用を足し終ったあとの、ころよい放心の中に立ちつくして、聞くともなく二人のやりとりを耳をかたむけた馬琴は、お路の語調に、これまでにない暢びやかさ明るさを感じて、ふっと、軽い動揺をおぼえた。

宗伯に死に別れてからの変化である。滝沢家の人として、生涯、後家を通す決意か、書画会前後のごたごたにも、ひきつづいての引越しさわざにさえお路が泣きごと一つこぼさず、二人の子供と舅姑の世話に集中してくれたのはありがたかったが、夫に死なれて元氣をとりもどすというのは、それまでの生活がいかに彼女にとって憂鬱なものだったかをものごたる証であり、よくぞ耐えてくれたと感謝する半面、馬琴の親ごろには、宗伯が生前、噛みしめつづけたであろう味気なさもまた、思いやられて、亡息が哀れになるのだった。

お百とさちが銭湯から帰り、きっちり正午に太郎も学塾からもどって、家の中はふたたびさがしくなりはじめた。

今日習ったところを太郎はかならず祖父の前で、もう一ぺん復習させられる。十歳の彼は明神下時代に、すでにいろは歌、村づくし国づくし往来ものをあげ、いま童子訓と実語教、素読は小学をまなんでいた。

昼食のあと、書齋の見台にかしこまって、

「司馬溫公曰く、凡そ諸々の卑幼は事大小となく、専行することを得る母かれ……」
つかえつかえ読んでいるところへ、

「ごめんください」

おとなう声が玄関でした。

縁側に腰をおろして一服しながら、太郎のたどたどしい口のうごきに微笑を送っていた清右衛門が、すぐ取り次ぎに立って行つたが、とたんにやや、うろたえ氣味に引き返してきて、

「地主さんですよ」

小声で告げた。

馬琴も瞬間、うろたえた。朝がたの手紙に腹をたてて、ねじこんでも来たかと思ったのである。

客間に出てみると、だが相手は他意ない顔つきで、

「堀内六左衛門です」

穏やかに名のつた。

「かけちがつて、これまで御意を得ませんでした、思わぬ御縁で高名な滝沢先生の知遇を得、光栄にぞんじております」

「あ、いや、愚老こそご挨拶その他、代人のみ差し立てて失礼いたしました。なにぶんにもごらんの通りの老耄……。おまけに一眼が不自由なため、つい目と鼻の先の外出すら思うにまかせません。ご容赦ください」

「さて、先刻の御書状ですが……」

と、手ぎわよく堀内は本題にはいった。

五十五、六……。武士としては物腰の柔らかすぎる、身だしなみのよい小づくりな人物である。事務関係の仕事をしている南町奉行所の古参与力——と、この家の前の持ち主から聞かされたのを馬琴はにわかに思い出して、

「いやあどうも。あの手紙の件でわざわざお越しとは……」

いささか怯んだ言い方をした。カツとなると筆^{ふで}めを發揮して、すぐ詰問口調の手紙など叩きつけるくせに、あの相手があらわれて詫^わびたり釈明などはじめると、その人柄や釈明のしかたにもよるが、馬琴はなんとなく忸怩^{じくじ}となり、せつかくの氣鋒も萎^なえて竜頭蛇尾に終るのが常だった。

「あの筍掘りの男は、道ひとつへだたた向かいの百姓家の三男でして、辞儀の仕方さえろくにわきまえぬ野良育ち……。ご挨拶せよと申しつけておいたのを怠^{おこた}った無礼は、幾重にも拙者、お詫びいたします」

こころもち堀内は頭をさげた。

「それから垣を結えとのご指示ですが、ご氣性の潔癖からすればむりもないご懸念とぞんじます。ただ、あの藪の筍は、自家はもちろん近所となり、親戚知友にくばっても消化しきれぬ朝ごとの採れ方で、過半は竹にし、それもあまり密になるため向かいの百姓家に伐^きらせて遣^{つか}わす始末なのです。小椽ながら直參^{じきさん}となれば、公儀より恩借の地にはえる竹や筍をまさか商家に売りさばくわけにもゆかず、通行人が盗むならいっそそれもよしということで垣などもめぐらさず放置していたこれまででして……」

「よくわかりました。わたくしの性格として、ちと固くるしく考えすぎたようで……」

「そんなわけですからどうぞ先生のお宅も、わが家の藪と思召してご自由にお採りください。

——もっともあの、筍というやつ、掘り出すのに少々コツがいりますし、古くしては味が落ちますので、毎朝二、三本ずつ掘りたてを勝手口に置かすことにしましょう」

ほとんど歯が抜けて、やわらかいところを細かに刻みこんだ炊き込み飯のほかは、煮つけても木の芽で和えても、いっさい筍の旨味は賞味できないことを、さすがにおくびにも出さなかったのは馬琴の都会人としての礼儀であつた。

世間話を二つ三つして、やがて堀内は帰つて行つたが、はやくも今日の分が供の下僕の手でかつぎこまれていたらしく、台所からは皮むきを手伝う子供たちのはしやぎ声にまじつて独特のみずみずしい青臭さが、竹林のただ中に居を移したほどにも、おびただしくただよつてきた。

さっそく母親にねだつて太郎は紫蘇漬けの梅干しを筍の皮に包んでもらう……。

「うめぼち、ねえ、たちもうめぼち」

と、ようよう舌の回りがけたさちまでが同じものを母に作らせて、酸っぱいのを我慢したい舐める顔のおかしさに、お百は笑いころげ、釣られて馬琴までが台所を覗いた。

「竹の皮は、わりとよい値で売れますよお舅さん」

と清右衛門はこまかいことを言う。

「今年竹がこれから伸びはじめると、皮がばらばら剥け落ちますからね。拾い集めればたちまち二貫や三貫にはなるはずですよ」

「皮だって地主のものだ。黙つて売りとばしなどしてはいけなだらう」

「でも、藪の清掃にはなるのですがねえ」

馬琴は書斎にもどり、茹であげられた筍が刻まれ、煮られ、飯に混ぜられて、ふっくら炊きあがる夕刻までふたたび著述に専念した。

筍を貰えるのはいいが、藪のおかげかもう蚊が出はじめている。どうも近ごろ、見えにくくなった一眼をかばいながら、とぼしい夕光の下へ机を出す馬琴につきまとして、細い蚊うなりも縁先に移動した。

「お祖父ちやま、ご飯だよ」

「ごわん」

太郎ときちがつれ立って迎えにきた。三味線の撥型に折りたたんだ筍の皮の、梅干しでまっ赤に染まったのをさちはまだ口に咥えている。

「お百、清右衛門はどうした？」

と、茶の間の、ちやぶ台の前に坐りながら馬琴は老妻にたずねた。

「帰りましたよ」

「せっかく筍飯ができたのに、食べさせていかせればよいではないか」

「このところ身体の具合がよくないとかで、灸点所に寄ると言っていました。筍は一本、大きいのを持たせてやりましたよ」

「身体がわるい？……あの、清右衛門がか？」

「当人も鬼の霍乱だと、言いわけしてましたけどね」

お百の手は、夫と話しながらも動くのをやめない。飯櫃から小皿へ、できたての筍飯をすこし取り分け、仏壇にそなえて灯明をあげる……。

初物が食膳を飾るたびに、欠かしたことのない宗伯への供養であるが、こんな気づかいのこま

やかさは、お百にしては稀有なことで、

(母親は、やはり母親か)

と、めずらしみながら馬琴は見ている。

息子が生きていたころは諸事、気のつきよう気の使いようがとんちんかんで、その点、男にしては神経質すぎる宗伯と箸のあげおろしにぶつかり合っていたお百である。

たとえば飯が炊きあがり、膳ごしらえにかかつてから、やっと気づいて、

「そうだ、おかずがなかったんだっけ……。何か買って来なくちゃ……」

あわてるような迂闊さだし、揚げたて焼きたてを賞味する惣菜、熱くして食べるもの冷やして食べるものなど、手順よくゆくほうがむしろふしぎで、宗伯がいくら癩癩を起こし馬琴が苦虫をかみつぶしても、持つて生まれた性分は七十年間牢固として直らず、ここ十年ほどはそれに、老い惚けさえ加わって始末はいっそう悪くなってきたのだ。

しくじりも不手ぎわも、むじやきに認めるならまだ、可愛げがあるのだが、非難されると躍起になって、逆に相手をへこまそうとかかるのもお百の性癖の困った点だった。

「また鮭？ おひるも、ゆうべも、おとついの晩もそうだった。なんとかすこし、考えてくれてもいいと思うなあ」

文句を言い出す宗伯に、お百はあらがう……。

「塩引きを一匹、貰っちゃったんだもの、しかたがないだろ」

「塩引きなら保つよ。ぶつつづけにこいつの焼いたのひと色じやたまりやしない。せめて野菜の